

先週の重原先生に続き、クラブ 22 の篠塚先生を含む 20 名が、警視庁の依頼で日本歯科医師会から派遣され、震災後 2 週目の石巻旧青果市場で検案のお手伝いをいただいた。

20 名の先生方は、東京都歯科医師会副会長の山崎先生がまとめてくださり、献身的に取り組んでくださった。検案所に安置されたご遺体の数は、800 体を超えていて、火曜日から現場に入っていた先生方は、初日に 80 体、二日目には 150 体の身元不明のご遺体の検案を済ませておられた。

24 日から 3 日間、現場の責任者を命ぜられた私は、この 20 名の助っ人がとても頼もしい限りだった。朝、8 時過ぎには宮城県警本部に集まり、9 時半には石巻に到着して、冷たくなっておにぎりを頬張って、夕方 5 時半まで頑張っておきた。仙台のホテルに戻るのには 7 時近く、夕食の後は、各班の班長と江澤先生、県警の方を交えてミーティング、暖房もトイレもないホテル、もちろん風呂に入ることはかなわず 6 日間。自ら志願してもつらいだろう。頭が下がる。

25 日に江澤先生の指示で旧青果市場から 1 km ほどのところにある石巻西高に行った。ここは、東松島市のご遺体を安置している。現場の責任者の警察官と挨拶を交わして状況を聞いたら、搬入されるご遺体の数は、終息傾向にあるということだった。しかし、検案が中断している。歯科医が配属されていない。江澤先生にすぐに連絡を取り、旧青果市場にいる 20 名の中から、4 名を連れて戻り、検案にあたった。東松島市は、旧矢本町と野蒜町が合併してできた新しい市である。

26 日、我々が帰るころ旧青果市場で収容したご遺体は 1500 体を超えた。まだまだ増えるだろう。我々の仕事に終わりはいつ来るのだろうか？

私の移動に使っていた車のガソリンも底をついてきたところ、石巻警察署の計らいで入れていただくことができた。ガソリンの補給のために、市街地にあるスタンドに行く道すがら、その悲惨さには、全く驚くばかりだった。水没して放置された車、流されてきた漁船、がれきの山、20 cm を超える堆積した泥（重油やガラスやヘドロなどを含み、悪臭を放っている）、いったいいつになったら片付くのか、皆目見当もつかに程である。

一概にがれきの撤去というが、その下にはご遺体が眠っていることもあるために、大きな重機に頼るわけにもいかず、自衛隊員が丹念に探索をしながら撤去をしている。大変な作業である。

全国各地から駆けつけてくれた警察の鑑識の方々にも驚いた。彼らは、東京はもとより関西からも駆け付けてくれているのだが、大雪の日にノーマルタイヤでしかも道中は車中泊で移動してくれて、この寒い中、懸命にご遺体の検案にあたっている。食事は、菓子パンに水のみだ。彼らの仕事ぶりは、もちろんマスコミに報道されることもない。しかし、毎日、黙々としかも懸命にこなしている。

震災直後の夜は、物騒だった。コンビニの ATM が盗まれたり、空き巣が多く徘徊していたり、果ては、ご遺体の財布から現金を盗む輩まで現れた。流されてきた車からガソリ

ンを抜き取るなんて可愛いほうである。

こちらに赴くようになって2週間目、最初は物見うさんで来ている連中に腹がったが、今はちょっと考えを変えた。物見うさんでもかまわないのでぜひ、皆さんに東北地方の沿岸を訪れていただきたい。この悲惨な現状は、実際に目で見なければ、決してわからない。これから日を追って、被災地の状態は変わっていくことと思う。今の現状を目に焼き付けて帰ってほしい。最近、テレビに宮沢章二さんの詩が流れている。『ここは、だれにも見えないけれど……』検案に行くようになってからというもの涙腺がゆるい。この詩が流れると被災地の情景が頭をよぎりグッとくる。

私の診療室においで下さっていた大船渡の患者さんにどうしても連絡が取れない。震災直後から沿岸沿いからみえていた患者さんに連絡を入れていたが、この患者さんだけが音信不通だった。住所近くのお店で難を逃れたところに2週間してやっと電話が繋がった。『仙台の歯医者ですが、……さんの消息はお分かりですか?』と聞くと、おばさんが電話の向こうで声を詰まらせながら答えてくれた。『……さんは、津波にさらわれて戻ってこない。』悲しい現実が耳に飛び込んできた。とても穏やかで料理の上手な美しいかただった。近くで取れたワカメを入れた炊き込みご飯を作って、わざわざ持ってきてくれたり、いろんな差し入れを下さった。安らかにお眠りください……。

石巻西高の遺体が、東松島市の小野地区体育館へと移動になった。新学期に備えてのことだろう。被災地は再生への歩を進めているようだ。

我々は検案しているこのご遺体はいつになったら、ご家族のもとへと帰るのだろう。アメリカ軍と自衛隊が合同で海底のご遺体の探索を開始したので、検案所にも4週間を海底で過ごしたご遺体が運ばれてきている。もう在りし日の面影はない。貝に蝕まれたり、腐食が進んできたご遺体が多くなってきた。皮膚表面は緑がかかった色をしている。緑膿菌の感染だろうと思われる。今日以降、検案のボランティアに見える先生方には、今まで以上に感染に関して神経を使っていかねばならぬそうである。心して来てほしい。

全国から支援物資が、毎日届いている。ありがたい限りであるが、もう命をつなぐものは、全てに行き渡っていないかもしれないが、量としては十分であろう。これからは、復興生活を営むにあたって必要なものが望まれるはずだ。お金である。政府や赤十字など、多くの義援金が集まっているように聞かすが、どこにどのくらいと悩んでいるのなら、とりあえずの金額を差し上げてもらいたい。当然ながら仕事もない。大企業経営者の方々、被災地の人々の仕事を提供してあげてください。職場を作って差し上げて下さい。現在、ボランティアの方々や自衛隊が手伝って、個人の住宅などの瓦礫を取り除いているが、瓦礫を取り除く会社を作って、地元の人々を採用してください。

今、私たちができることを、何でもいいから少しずつ。日本が一つのチームなら、皆が被災地の光景を心に焼き付け、忘れないでほしい。